Tsukuba Psychological Research
2013. 46. 17-29

日中子どもの未来展望[1,2)]
—子どもの未来への楽しみと心配に関する日中比較—

筑波大学大学院人間総合科学研究科　陳　　晶晶[3)]

筑波大学人間系　長崎　　勤・庄司　一子・茂呂　雄二

Future perspectives within Japanese and Chinese children: A comparative study about children's expectations and concerns for the future

Jingjing Chen (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)
Tutomu Nagasaki, Ichiko Syouji and Yuji Moro (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Adopting a comparative methodology, this study attempts to identify similarities and differences in children's expectations and concerns for the future between Japan and China. Fourth-grade elementary-school children were invited to describe three future events that they expected and three future events that they were concerned about. Qualitative analysis was conducted on the response contents. Comparison analysis revealed that, to some extent, responses related to both expectations and concerns about the future were very similar. However, it also indicated that Chinese children have more active and motivated attitudes towards their futures than Japanese children. Moreover, Chinese children also have much clearer images about what they want to be in the future than the Japanese children. The study argues that differences in the traditional cultures and the current social environments between two countries may contribute to these results.

Key words: future perspective, expectations and concerns for future, Japan, China

問　題

近年，日本では経済格差の拡大に伴い，未来に希望が持てる人と絶望する人が社会階層によって分裂するといった「希望喪失の格差」が問題になっている（山田，2011）。社会の先行きが不透明になりつつある中で，自分の未来に無力感を抱く個人が増える一方である。このような社会環境は，子どもたちの未来へのイメージにも影響を及ぼしているようである。未来展望に関する日本の実態調査の中で，子どもが未来に対して低い達成意欲を示し，将来社会に貢献しようとしない姿勢が示されている（ベネッセ，2009）。また，従来教育システムが担ってきた

1）本研究の一部は，日本教育心理学会第54回大会において発表された。
2）本研究は，筑波大学プレ戦略イニシアティブ「未来の子ども育ち研究支援プロジェクト」の研究成果の一部である。
3）本調査にご協力いただきました，筑波市教育委員会，山形県三川町教育委員会，及び北京市人民政府外事办の方々に，厚くお礼を申し上げます。
　また，本論文の作成にあたり，貴重なご意見をいただきました茂呂研究室の皆様，統計処理に多大なご協力を頂きました松井研究室の方々にお礼を申し上げます。

「職業の保証」「階層上昇」機能の崩壊（山田，2011）に伴う勉強・学歴への不信の影響なのか，小学生を対象とした学習実態・意識の国際比較調査の中で，日本の子どもは，今の学習が将来役に立つという思いや，将来社会的に成功したいという意識が弱いことが明らかになった（ベネッセ，2006）。

一方，中国では，近年急速な経済成長を遂げながらも，せわしく，利に走るような社会全体の雰囲気も指摘されている（蒋豊，2012）。このような社会環境の中で，中国の子どもの未来の夢に功利的なものが多いことが見られ，子どもの価値観がねじ曲げられているとの指摘がある（蒋豊，2012）。

子どもは次世代を担う重要な存在であり，彼らが未来をどう捉え，意識しているかを明らかにすることは重要な意味を持つと考えられる。柏尾（2006）が指摘するように，「この希望が持ちにくい社会でこそ，時間的展望領域での研究が一層求められている」のである。

時間的展望

未来のことを考え，見通しを立てたり，不安や希望を感じたりすることを説明する心理学的概念は「時間的展望（Time Perspective）」である。レヴィン（1951）は，時間的展望を「ある一定の時点における個人の心理的過去と未来についての見解の総体」と定義している。過去，現在，未来の3つの時間的次元の中で，未来に注目し時間的展望を捉える場合は，「未来展望（Future Time Perspective）」という用語が使われている。

時間的展望の研究意義について，レヴィンはFarber（1944, in Lewin, 1951/1979）の研究を引用して説明した。Farberが囚人の苦痛と刑務所の労働の関係について検討を行ったところ，囚人の苦痛の量は，労働における休憩時間や，報酬額との関連がほとんど見られず，主観的な満足感との相関も低かった。しかしながら，判決の不当という過去の経験と服役の途中で釈放される可能性という未来への希望は，囚人の苦痛の量と高い相関を示すことが明らかになった。すなわち，我々は過去や未来の事柄と関連付けながら，現在の状況や行動を意味づけるといえる。

時間の感覚・意識の発達

子どもの時間の感覚・意識の発達様相に関して，フレス（1957）は以下のように記述している。赤ちゃんがこの世に生まれ落ちると，生活の中で欲求とその充足の間の時間的なズレを常に経験する。このような経験が繰り返されるに伴い，赤ちゃんの意識の中で，次第に過去と未来といった時間の次元が構成されていく。

また，幼い子どもたちを調査対象に，時間に関わる言葉の出現を調べる研究が多く行われてきた。その中で，日本の子どもを対象に行われた調査では，「きょう」という言葉は2歳前後に現れ，「あす」が意味通りに使われ始めるのは2歳半頃であり，「きのう」は3歳ごろに正確に使われるようになることが明らかになった（岩淵，1968）。

未来の時間について，子どもたちの認知的能力の発達を調べたところ，1歳6か月頃，子どもがある状況と結びついた行動の予測ができるようになり，4歳になると，「今度のクリスマス」「今度の誕生日」「次の冬」といった計画が立てられるようになる。7，8歳になると，「僕は駅長さんになる」「私はおよめさんになる」といった最初の人生設計が始まる（フレス，1957）。

子どもの発達過程において，時間的視点を取り入れた研究として，ザゾの「発達の力動過程検査」（1969）が上げられる。この研究では，まず子どもに「人生のどの時期に生活したいか」を問い，「赤ん坊」「今の年齢」「大人」から一つを選択してもらい，続いて選択の理由を質問する方法を採用している。その結果，子どもはまず過去の生活との比較で今の自分を価値づける段階から，将来の生活との比較で自己の価値づけを行う段階を経て，最後に過去と将来の両方との比較で，今の自分を価値づけるという三つの水準を経て成長発達していくことが明らかになった。しかし，塚野（1994）がこの研究を日本各地で追試したところ，ザゾ（1969）の結論を再現できなかった。北海道大学の研究グループ（2001）による小学校6年生，中学校3年生，高校2年生を対象とした「人生イメージ」の調査の中では，ザゾ（1969）の研究結果をある程度支持する結果が得られた。

これらの研究から，子どもたちの成長発達において，「明日」「未来」への意識が重要な意味を持つといえる。また，時間的展望は単なる意識の問題ではなく，意識による行動の調整や動機づけ，また人格の形成にも繋がってくる点に重要性があるとも指摘されている（子安・白井，2011）。

時間的展望の発達における文化の役割

一方で，子どもの未来展望の発達には，社会文化的要因が影響を及ぼす。例えばSundberg, Poole, & Tyler（1983）は先進的な文化を持つアメリカ，オーストラリア及び伝統的な文化を持つインドを比較対象とし，子どもの未来展望の形成に及ぼす文化の役

割を検討した。研究結果の一部として，自分の未来を決定する権利のないインドの女性が，３か国の比較対象の中で最も短い未来までしか，人生を展望できないことが示された。また，アメリカに比べ，社会化の過程において，求愛や結婚，子どもの問題などが主に親によって決められるインドでは，子どもたちが自分の未来における結婚や子どもの問題よりも，他者の未来の結婚や子どもの問題に高い関心を示すことが明らかになった。

子どもの未来展望から，異なる社会文化的な特徴が推測できるにとどまらず，実際に現在の社会の問題も浮き彫りにすることができる。例えばイギリス，オーストラリア及びフィンランドの間で，子どもの未来展望を比較したところ（Solantaus, 1987），イギリスでは仕事や雇用，人生の経済的側面に関して，子どもがより多くの希望と不安を挙げていた。これは当時のイギリスの高い失業率を反映していると考えられる。また，反核を頻繁に話題に取り上げていたマスコミの影響で，当時のフィンランドの子どもの戦争への不安がほかの２国より高いことも示された。

目的

そこで，本研究では，社会・文化的背景が異なる日本と中国の子どもを対象に，彼らの未来展望を検討することを目的とした。具体的に，子どもの未来への「楽しみなこと」と「心配なこと」を調べ，そこで得られた結果について，まず日中の子どもの記述内容について検討した。また，記述内容を基に分類したカテゴリ間の関連を見るために，数量化Ⅲ類を用いて分析を行った。そこで示されたカテゴリ間の関係を両国間で比較し，展望構造について検討した。結果を踏まえ，子どもの未来展望の発達に影響する要因を明らかにし，日中の現在の社会に伏在する問題や特徴について考察した。

方　法

調査対象者

日本は，山形県の小学校の４年生71名，茨城県の小学校の４年生374名の計445名であった（男性213名，女性190名，42名が未記入であった）。

中国は，北京市にある小学校の４年生247人（男性127名，女性120名）であった。なお，この小学校は優秀な児童が通う小学校として知られている。

調査時期

日本では2011年３月及び10月に調査を実施した。一方，中国では2012年２月に調査を行った。

調査内容

調査は質問紙調査であった。日本で実施した質問紙の中国語版を作成し，中国での調査を実施した。

①フェイスシート（学校，学年，学籍番号，名前，性別，生年月日）

②質問項目

1-1.　あなたは未来を楽しみにしていますか。当てはまるものに○をつけてください（「とても楽しみ」「やや楽しみ」「わからない」）。

1-2.　どんなことが楽しみですか？（自由記述，３つまで）

2-1.　あなたは未来を心配していますか。当てはまるものに○をつけてください（「とても心配」「やや心配」「わからない」）。

2-2.　どんなことが心配ですか？（自由記述，３つまで）

3.　あなたは未来をどのような未来にしたいですか？（自由記述，３つまで）

結果と考察

１．質問1-2，質問2-2及び質問３における回答数の比較

まず，質問1-2「どんなことが楽しみですか」（以下では「楽しみなこと」と省略する），質問2-2「どんなことが心配ですか」（以下では「心配なこと」

Table 1
質問1-2，質問2-2及び質問３における回答数

	質問1-2「どんなことが楽しみ」		質問2-2「どんなことが心配」		質問３「未来像」	
	総回答数	平均回答数（SD）	総回答数	平均回答数（SD）	総回答数	平均回答数（SD）
中国	607	2.5 0.8	522	2.1 1.0	546	2.2 0.9
日本	861	1.9 0.9	757	1.7 1.0	827	1.9 0.9

と省略する），及び質問3「あなたは未来をどのような未来にしたいですか」（以下では「未来像」と省略する）における回答数をまとめた結果をTable 1に示す。

国籍及び質問間の回答数の差を見るために，2要因分散分析を実施した。国籍（$F(1, 689) = 51.28$, $p < .01$）と質問（$F(2, 1378) = 32.96$, $p < .01$）の主効果が有意であった。三つの質問のいずれにおいても，中国の回答数の平均値は日本より大きかった（$p < .01$）。また，「楽しみなこと」の回答数が最も多く，次いで「未来像」，「心配なこと」の回答数が最も少ないことが明らかになった（$p < .01$）（Figure 1）。

2．回答述内容の分析

2-1.「楽しみなこと」・「心配なこと」のカテゴリ化

「楽しみなこと」及び「心配なこと」について，日本では総数1379個，中国では総数931個の回答が得られた。心理学専攻の大学院生2名と共同で，KJによるカテゴリ化を行った結果，日本では「楽しみなこと」について12個のカテゴリ，「心配なこと」について11個のカテゴリに分類した。中国では，「楽しみなこと」と「心配なこと」の両方とも11個のカテゴリに分類された。両国の回答内容について得ら

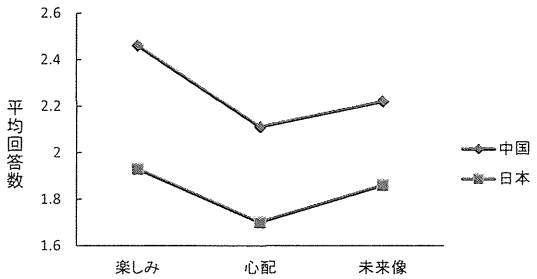

Figure 1.　質問の回答数に対する国籍と質問内容の影響

Table 2-1
「楽しみなこと」・「心配なこと」の分類カテゴリ（日本）

分類カテゴリ	度数	回答例
身体の成長変化への楽しみ	28	「力が強くなる」「どのぐらいせがのびたか」
病気，死への心配	85	「びょうきにかかってしまったら」「生きているか」
自己未来像への楽しみ	34	「いい男になれるか」「どんな人になっているか」
自己未来像への心配	44	「ちゃんとした大人になっているか」「悪い大人になっているか」
仕事，進学，勉強への楽しみ	89	「仕事は何しているか」「テスト100点かな」
就職，失業，進学，勉強への心配	97	「仕事ができるか」「せんもん大学に入れるか心配」
住居など生活像への楽しみ	43	「大きな家に住みたい」「どんな生活を送っているか」
お金，生活像の心配	57	「お金があるかないか」「ふつうにくらせるかしんぱい」
人との関係性の変化への楽しみ	64	「どんな友達がいるか」「子供を産み育てる」
人との関係性の変化への心配	66	「お母さんがなくなってしまったらかなしいから」「友達がいないこと」
大人になること，漠然とした大人像への楽しみ	60	「大人になれる」「大人になること」
自由な行動への楽しみ	82	「車を運転したい」「酒が飲めること」
被災，加害の心配	64	「こうつうじこにあわないだろうか」「いじめられそう」
目標実現への楽しみ	98	「プロの野球選手」「科学者になること」
目標実現への心配	38	「しょうらいのゆめかなうかな」「モデルになれないかもしれない」
余暇活動への楽しみ	67	「遊びのこと」「友達と遠くにかい物に行きたい」
科学技術，道具の進化への楽しみ	84	「車が空をとびそうだから」「科学がはってんしてるかな」
自然環境，自然災害への心配	93	「ちきゅうがこわれる」「ふじさんが大ふんかするから」
生活環境，日本，世界，地球への楽しみ	47	「どうゆうお店があるか」「どんな町になっているか」
生活環境の変化，科学，政治経済への心配	37	「日本の政治」「きたない町にならないか
戦争，事件，事故への心配	43	「また，戦争がおきないか」「事けんなどが心配」
漠然とした楽しみ，分からないから楽しみ	26	「何があるかわからないから」「どうなっているか楽しみ」
漠然とした心配，分からないから心配	33	「ふきつなよかんがする」「なにがなくなる」

れたカテゴリを Table 2-1，Table2-2に示す。

続いて，各回答者の回答内容が，作成されたカテゴリに該当する場合「1」を，該当しない場合「0」を割り当て，数量化Ⅲ類を行った。さらに，カテゴリ間の関連の特徴をより明確に示すために，クラスタ分析（ウォード法）を実施した。

以下では，クラスタ分析によって得られた上位カテゴリは『　』内に，回答内容をもとに分類したカテゴリは【　】内に，カテゴリの回答例は「　」に示す。

2-2. 両国の回答内容における共通点と相違点

（1）カテゴリ間での質的内容の共通点

日中の「楽しみなこと」と「心配なこと」の分類カテゴリを比較すると，以下の五つの類似点があることが明らかになった。

第一に，未来は身体の変化をもたらす。両国ともに【身体の成長変化】に関する展望内容が得られた。具体的には，「自分の顔（日本）」「未来の自分の容姿（中国）」などの楽しみ，また「病気になっていないか（日本）」「死（中国）」などの【病気・死】の心配が述べられていた。

第二に，日中ともに，教育・仕事・新しい家族の構築など，人生の節目や重要なイベントに関する未来への展望内容が得られた。具体的には，「どんな高校にいけるか（日本）」「理想的な中学校，高校，大学に入ること（中国）」といった楽しみ，「受験に受からないこと（日本）」「大学に受からないこと（中国）」といった心配など勉強・進学に関する記述があった。また「どんな仕事をしているか（日本）」「い

Table 2-2
「楽しみなこと」・「心配なこと」の分類カテゴリ（中国）

分類カテゴリ	度数	回答例
身体の成長変化への楽しみ	23	「未来の自分がどんな容姿であるか」「いつまでも健康である」
病気，死への心配	27	「病気になるか心配」「死」
漠然とした自己未来像への楽しみ	34	「未来の自分がどうなるか」「自分の未来の生活がどうなるか」
自己未来像への心配	35	「自分が役に立つ人になれるかどうか」「未来の自分どんな容姿なのか」
自己実現への楽しみ	44	「国に貢献する」「自分がどうな成就できるか」
仕事への楽しみ	100	「親がなくなる」「幸せな家庭を持つかどうか」
就職，失業への心配	69	「いい仕事に就けないか」「仕事ができない」
勉強，進学，留学への楽しみ	75	「どの国に留学に行くか」「いい大学に入る」
勉強，進学への心配	44	「大学に入れない」「成績が落ちる」
物の所有，お金への楽しみ	18	「車がほしい」「大きな家が買うかどうか」
お金，生活の経済能力への心配	21	「アパート代が心配，家が買えるかどうか」「どうやって金稼ぎする」
目標実現への楽しみ	36	「パイロットになれるかどうか」「医者になる」
余暇活動への楽しみ	23	「自分の誕生日を楽しみにしている」「世界中に旅行に行く」
人との関係性の変化への心配	26	「未来のクラスメートを心配する」「自分の未来の人間関係」
人との関係性の変化への楽しみ	41	「子どもを産む」「お父さんになる」
被害への心配	18	「火災で家の本がなくなる」「ドロボウに入られるか」
科学技術，道具の進化への楽しみ	53	「未来の新しい発明物に楽しみ」「未来の新型の設備」
生活環境の変化，世界，中国の発展，平和な世界への楽しみ	60	「地下鉄が家の前まで通る」「中国が世界中の一番強い国になる」
自然環境，自然災害への心配	76	「排気ガス」「地震」
漠然とした心配，世界の滅亡への心配	29	「世界の滅亡が心配」「地球が滅亡するかどうか」
戦争への心配	59	「第三次世界大戦が引き起こるかどうか」「未来で戦争がおこる」
生活環境の変化，科学発展への心配	20	「物価が高い」「水資源がなくなる」

い仕事が見つかること（中国）」といった楽しみ，「ちゃんと仕事ができるか（日本）」「仕事が見つからないこと（中国）」といった心配など，【仕事】や【就職，失業】に関する記述があった（日本の勉強・進学及び仕事に関する楽しみと心配の記述については，それぞれ【仕事・進学・勉強】【就職・失業・進学・勉強】の一つのカテゴリにまとめた）。新しい家族を持つことに伴う【人との関係性の変化】の記述に関して，「どんな友だちがいるか（日本）」「子どもが生まれること（中国）」といった楽しみ，「友達がいっぱいいるか（日本）」「子どもがいないか（中国）」といった心配が挙げられる。加えて，これらの人生の節目におけるイベントにとどまらず，将来の自分が一人前になり，社会生活を始めることを想定して，「どこに住んでいるか（日本）」「どんな生活をしているか（中国）」といった【住居など生活像】への楽しみが挙げられ，「お金に困らないか（日本）」「貧乏になっているか（中国）」などの【お金・生活の経済能力】に関する心配も同じく見られた。

第三に，未来は理想的な自己を実現する（【自己未来像】）場，あるいは夢や【目標の実現】の場として共通に展望されていた。未来の理想的な自己像とは，日本では「りっぱな人になっているか（楽しみ）」，中国では「社会の役に立つ人になることが楽しみだ」などの記述が挙げられる。また，目標や夢に関する記述として，日本では「サッカー選手になりたい」などの記述が見られ，中国では「医者になりたい」などの記述が挙げられる。その中で，特に夢の実現に関する記述において，日本では具体的な対象より，「夢がかなうから（楽しみ）」といった漠然とした記述が多い点が特徴的であった。

第四に，未来への展望は自分に関することだけでなく，未来の科学技術や生活環境，自然環境といった外部世界に対する楽しみと心配も多く述べられていた。具体的には，「未来の街はどうなっているか（日本）」「地球の環境（中国）」といった未来【生活環境の変化】などへの楽しみ，「車が空を飛びそうだから（日本）」「科学が進んで今よりもっと便利になること（中国）」といった【科学技術，道具の進化】によって，今の生活が改善されることへの楽しみが挙げられる。未来の外部世界への心配に関しては，例えば「地球温暖化（日本）」「自然災害がないか（中国）」といった【自然環境，自然災害】に関する心配，「戦争が起きないか（日本）」「戦争（中国）」といった【戦争】に関する心配の記述が得られた。

第五に，「心配なこと」の中で，日中ともに，「地球が滅亡しないか（日本）」「世界の終末が来ないか（中国）」などの記述に代表される【漠然とした心配・世界の滅亡】のカテゴリが得られた。これは「人類滅亡とかテレビでやっていたから（日本）」といった子どもの記述から，マスメディアを介した情報が影響していることが窺えた。

（2）カテゴリ間での質的内容の相違点

日中の間に，共通な展望主題が多く見られるものの，回答内容には，異なる特徴もまた示されていた。その中で，最も明確に相違が見られた内容として，以下では【勉強・進学】および【自己未来像】を取り上げて検討する。

勉強・進学　両国の「楽しみなこと」と「心配なこと」のいずれにおいても，勉強や進学が優位な話題であった。その回答内容を比較すると，異なる特徴が見出された。例えば日本では「どんな高校にいけるか」のような問い方で，進学への楽しみを表す内容が多かったに対して，中国では「自分の最終学歴」「期末テストで100点を取ること」「一流の学校に入ること」など，教育における達成や最終的な成果を強調する傾向が見られた。

また，中国では，「外国に留学に行くこと」といった留学に関する記述が多く見られた。留学ブームになりつつある中国では，子どもが人生の早い段階で，すでに留学の夢を持つことが分かった（Table 3）。

自己未来像　自己の未来像について，両国の子どもが理想の外見から自己価値の実現まで，多くの側面から記述していた（Table 4）。その中で，中国の子どもには将来「どんなことが達成できるか」といった記述が多く見られ，将来の自分に対して，高い達成意欲を示していた。また，中国では，「大人になったら，親孝行する」「国に貢献できるような人になる」などの記述が多く見られ，子どもが国や社会，周りの人との関わりの中で，自己実現を求める傾向が窺えた。

それに対して，日本では，未来の自己像に関して，「どんな人になっているか」「（未来の）自分が何をやっているか」「大人になること」という記述が多く存在し，未来の理想的な自己像が不明瞭な傾向が見られた。また，「大人になることが楽しみだ」「自分が何をやっているか（楽しみ）」などの記述が多くあり，最終的に，日本の子どもの未来自己像の特色を反映すると考えられる【大人になること，漠然とした大人像】のカテゴリが得られた。

未来の自己に関して，比較的明確な自己像を持つ中国の子どもに対して，日本の子どもが大人になるまでの成長過程そのものをより楽しみにしていることが明らかになった。また，将来の自己像が不明瞭

であり，漠然としていることも日本の子どもの特徴であった。

3．数量化Ⅲ類による分析の結果

日中の記述内容の特徴を比較するために，まず日本の子どもの「楽しみなこと」と「心配なこと」の分類カテゴリについて，数量化Ⅲ類を用いた分析を行った。いずれのカテゴリについても，解釈が可能な軸として第1軸と第2軸が抽出された。第1軸は「展望内容の明確性に関する軸」と解釈された。正の方向に行くほど展望内容が漠然としたものになり，負の方向に行くほど，より具体的な詳細に関する記述になり，展望内容が明確になっていることを意味する。第2軸は「私的未来―外的未来に関する軸」と解釈され，正の方向に行くほど，外部世界に対する関係が強まり，負の方向に行くほど，個人世

Table 3
「進学・勉強」に関する日中両国の回答内容の比較

	上位カテゴリ（回答数）	下位カテゴリ（回答数）	回答割合	回答例
中国	勉強・進学・留学への楽しみ（75）	学歴（5）	6.70%	「自分の最終の学歴」
		成績（8）	10.70%	「期末テストで100点を取ること」
		留学（8）	10.70%	「外国に留学に行くこと」
		有名な学校への進学（26）	34.70%	「理想的な大学に入ること」
		その他（28）	37.30%	「どんな大学に入るか」
	勉強・進学への心配（44）	学歴（4）	9.10%	「将来の学歴」
		勉強の難しさ・成績（11）	25%	「高学年になると，成績が落ちる」
		受験・進学（29）	65.90%	「いい大学に受かるか」
日本	仕事・進学・勉強への楽しみ（89）	進学・勉強（13）	14.60%	「どんな高校に行けるか」「いろいろな勉強」
	就職・失業・進学・勉強（97）	勉強の難しさ・成績（16）	16.49%	「難しい勉強」
		受験・進学（13）	13.40%	「受験に受からないことが少し心配」

Table 4
「自己未来像」に関する日中両国の回答内容の比較

	上位カテゴリ（回答数）	下位カテゴリ（回答数）	回答割合	回答例
中国	自己実現（44）	何かを達成する（4）	9.10%	「どんな達成ができるか」
		親孝行（12）	27.30%	「大人になったら，親孝行をする」
		社会，国，世界に役に立つような人になる（25）	56.82%	「国に貢献できるような人になる」
		才能のある人，その他（3）	7.81%	「リーダーのような人になる」
	自己未来像の実現の心配（35）	容姿（11）	31.40%	「背が高くない」
		偉い人（5）	14.30%	「国のリーダーになれないこと」
		役に立つ人（6）	17.10%	「役に立つ人になれるか」
		親孝行，国に貢献できる人（9）	25.70%	「両親を養えるか」
		その他（8）	22.90%	「未来の自分が何もできていないか」
日本	自己未来像への楽しみ（34）		100%	「どんな人になっているか楽しみ」
	大人になること，漠然とした大人像（60）	大人になること（19）	31.70%	「大人になるのが楽しみ」
		自分がどうなるか，何しているか（30）	50%	「自分が何をやっているか」「自分がどのようになっているか」
		その他（11）	18.30%	「どんな人生を送っているか」
	自己未来像の実現の心配（44）		100%	「ちゃんとした大人になっているか」

界への関係が強まることを意味する。

次に，カテゴリ間の関係をさらに明確に示すために，クラスタ分析（ウォード法）を実施した。各クラスタの特徴が最も明瞭に見られると考え，「楽しみなこと」の分類カテゴリを五つのクラスタ（Figure 2-1），「心配なこと」の分類カテゴリを四つのクラスタに分類した（Figure 2-2）。

中国の記述内容についても，同様な方法を用いて分析を行った。「楽しみなこと」と「心配なこと」のいずれについても解釈可能な軸が抽出された。第1軸は「受動的に受ける変化―能動的に求める変化に関する軸」と解釈し，第2軸は「私的未来―外的未来に関する軸」と解釈することが適当と考えられた。次にクラスタ分析（ウォード法）を適用した結果，「楽しみなこと」と「心配なこと」のカテゴリは，両方とも四つのクラスタに分類された（Figure 3-1，Figure 3-2）。

3-1. 両国の「楽しみなこと」

クラスタの命名　まず，日本の「楽しみなこと」のカテゴリについて得られた五つのクラスタをそれぞれ『外部世界』『自己像と生活像』『目標の実現』『漠然とした楽しみ』『漠然とした大人像』と命名した。

一方，中国の「楽しみなこと」のカテゴリについては四つのクラスタが得られ，それぞれを『外部世界』『自己像と生活像』『目標の実現』『自己実現と物の所有』と命名した。

日中両国それぞれの分析結果から採用した第1軸と第2軸を使い，2次元平面上にカテゴリを配置した図がFigure 2-1とFigure 3-1である。

展望構造の比較　「楽しみなこと」に関する記述内容において，日中とも，身体の成長，仕事，進学・勉強，新しい家族の構築など，未来の自分像と生活像を中心とする「私的方向」から，科学の進歩，国や世界の発展，生活環境や自然環境を中心とする「外的方向」へと，話題が広がる特徴が見られた。

しかしながら，日中の「楽しみなこと」の展望構造には明らかな違いも存在していた。Figure 2-1に示すように，日本の子どもにおいては，第1軸の負の方向に行くほど，やりたい活動（【余暇活動への楽しみ】），やりたいこと（【自由な行動への楽しみ】），なりたい人やつきたい職業（【目標実現の楽しみ】）といった，目標が明確になっている記述内容のカテゴリが一つのクラスタ（目標の実現）としてまとまっているが，正の方向に行くと，【漠然とした楽しみ，分からないから楽しみ】【大人になること，漠然とした大人像への楽しみ】といった，目標がはっきりしない回答内容のカテゴリが布置されている。すなわち，目標の「明確―漠然」方向の分布は，日本の子どもたちの「楽しみなこと」の展望構造における一つの特徴といえよう。

これに対して，Figure 3-1に示されるように，中国の子どもたちでは，第1軸の正の方向に，つきたい職業（【目標の実現への楽しみ】）や，やりたい活動（【余暇活動への楽しみ】）といった能動的に求める変化に関するカテゴリが，一つのクラスタ（『目標の実現』）としてまとまっているが，軸の負の方向に，身体の成長変化，仕事や教育，関係性の変化など，人生の自然な流れの中で，受動的に受ける変化に関するカテゴリが，一つのクラスタ（『自己像と生活像』）にくくられている。すなわち，記述内容における変化が「受動的―能動的」に生じる方向の分布は，中国の「楽しみなこと」の展望構造の特徴であるといえよう。

また，中国の子どもたちに関する分析結果の中で（Figure 3-1），もう一つの特徴は【自己実現への楽しみ】と【ものの所有，お金への楽しみ】が一つのクラスタ（『自己実現と物の所有』）にまとまって布置されていることである。すなわち，将来，自己価値の実現を楽しみにしながら，それと同時に物質的な充足を求めている子どもが多い。これは，将来の自己価値を，物質的な獲得あるいは経済能力を基準に考えている中国の子どもの現在の価値観を反映しているのではないかと考えられる。

3-2. 両国の「心配なこと」

クラスタの命名　日本の子どもたちの「心配なこと」のカテゴリについて得られた四つのクラスタについて，それぞれを『外部世界』『自己像と生活像』『目標の実現』『漠然とした心配』と命名した。

一方，中国の子どもたちでは，四つのクラスタをそれぞれ『外部世界』『自己像と生活像』『自己未来像と経済能力』『漠然とした心配』と命名した。

両国の分析結果を踏まえ，第1軸と第2軸を採用した。2次元平面上にカテゴリを配置した図がFigure 2-2とFigure 3-2である。

展望構造の比較　「楽しみなこと」と同様に，「私的未来―外的未来」軸（第2軸），「明確―漠然」軸（第1軸）で，日本の子どもたちの「心配なこと」のカテゴリの分布の構造を説明することができる。

一方，中国の子どもたちでは，「心配なこと」のカテゴリの分布は，「楽しみなこと」と同様，「私的未来―外的未来」軸（第2軸），「能動的―受動的」軸（第1軸）で説明できると考えられる。

「心配なこと」のカテゴリは，両国とも四つのクラスタに分類した。その中で，日本では『目標の実

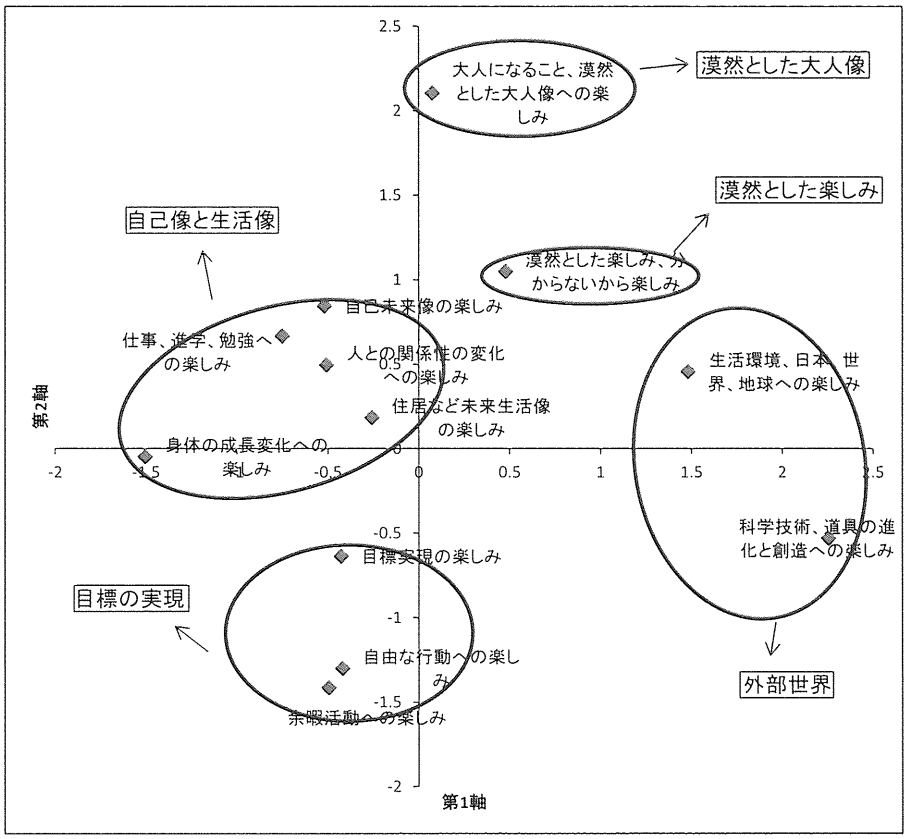

Figure 2-1　日本の子どもたちにおける「楽しみなこと」のカテゴリに関する数量化Ⅲ類の結果

現』，中国では『自己未来像と経済能力』がそれぞれ国の特有のクラスタであった。

特に，中国の「心配なこと」のカテゴリのクラスタ分析において，将来の自分の理想像に関する記述から構成された【自己未来像】が，【お金，生活の経済能力】とともに一つのクラスタ（自己未来像と経済能力）にまとめられた（Figure 3-2）。これは「楽しみなこと」の分析結果でも示されたように，経済的達成を自己実現と見なす今の中国の子どもの価値観を反映していると考えられる。

また，第１軸が未来到達まで生じる変化が「能動的か―受動的か」を表す軸と解釈できるとすれば，中国の【勉強・進学】のカテゴリはかなり受動的な方向に布置されている（Figure 3-2）。実際に，中国では，子どもが勉強に対して高い関心を示しながらも，勉強への意識が受動的で，勉強を盲目的にしているという特徴が，ほかの調査（ベネッセ，2006）の中でも示されている（調査地域は同じく中国北京であった）。その解釈として，中国の子どもたちは，親と学校から大きな期待を背負われる中，勉強の目的が学習の喜びよりも，親の期待に応えることや，将来の出世などに動機づけられていることが多いのではないと考えられる。

結　論

本研究では，未来への「楽しみなこと」及び「心配なこと」から，日中両国の子どもの未来展望を比較検討した。また，その分析の結果から，社会・文化的環境の違いが子どもの未来展望の発達に与える影響を究明しようと試みた。

まず，「楽しみなこと」と「心配なこと」の回答内容を基に，分類したカテゴリから，日中の子どもの展望主題は全体的に類似していることが分かった。また，本研究で得られた展望内容のカテゴリは，イベントテスト法で子どもの未来展望を調べたNurmi（1987, 1989）とLammら（1976）の研究結果と類似していた。すなわち，子どもの未来への展

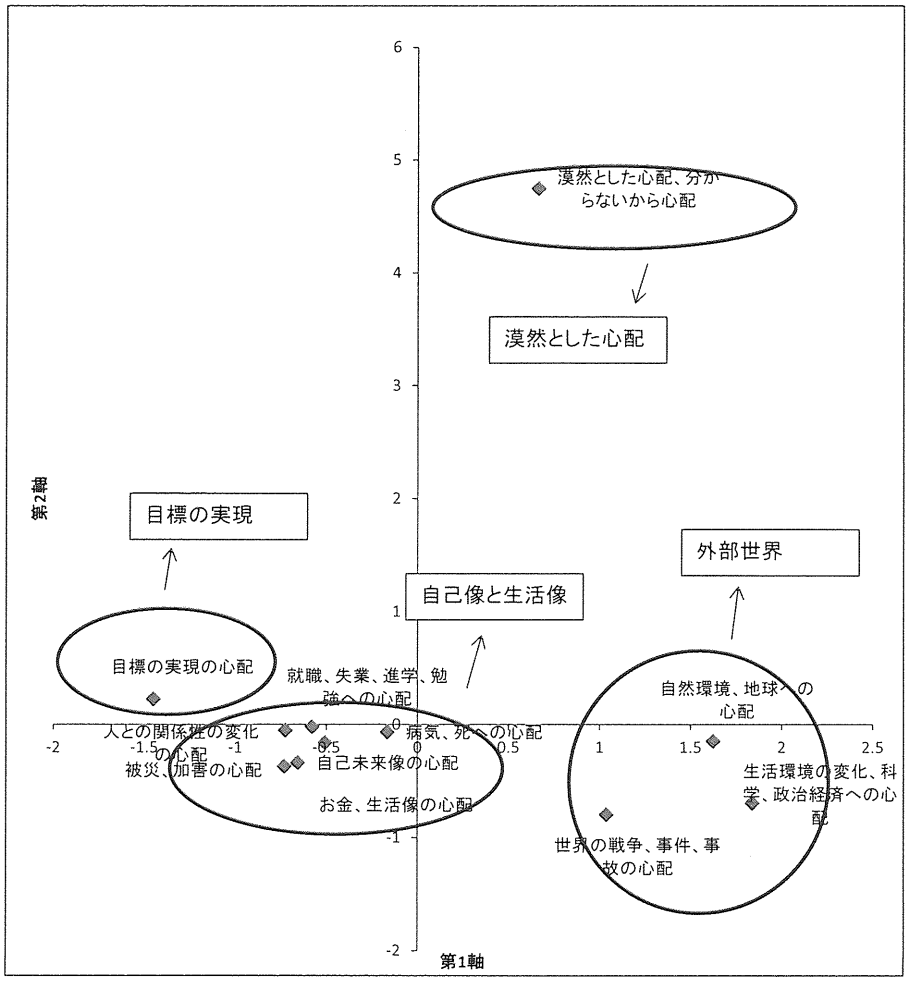

Figure 2-2 日本の子どもたちにおける「心配なこと」のカテゴリに関する数量化Ⅲ類の結果

望の枠組みは，調査した時代や国を問わず，全体的に似通う傾向にあるといえよう。

具体的には，日中の未来展望は以下のいくつかの領域で，共通な話題を持っていると見られた。

まず，未来は身体の変化をもたらす。この点については将来の自分の外見や，容姿への楽しみ，病気，死などに対する心配が共通に見られた。

また，未来は，教育・仕事・新しい家族の構築といった人生の発達課題に関わる。日中両国の子どもたちの展望内容の中で，これらの発達課題はいずれも主要な話題であった。

その背景には，日本や中国で共通に見られる文化的規範が考えられる。すなわち，社会の単位としての個人が生まれてから，まず学校で教育を受け，次に仕事につき，それで新しい家族を構築するという段階を経て，人生を過ごすことが多い。人生の各段階で，それぞれの発達課題を達成することが日中両国の文化において期待されている。今回の結果から，この文化的規範が幼い頃からすでに内在化されていることが推測される。

次に，未来は夢の実現の場として，両国の子どもたちに同じく展望されている。このような夢とは，「将来なりたい人になる」といった自己実現から，「やりたいこと」「つきたい職業」といった目標の実現も含んでいた。とくに今回の調査結果では，日本の子どもたちに未来の自己像に対する，漠然とした記述が多く見られた。それに対して，中国の子どもがより明確な未来自己像を持ち，親孝行や，国・社会・周りの人に貢献できるような人を志向する傾向が見られた。

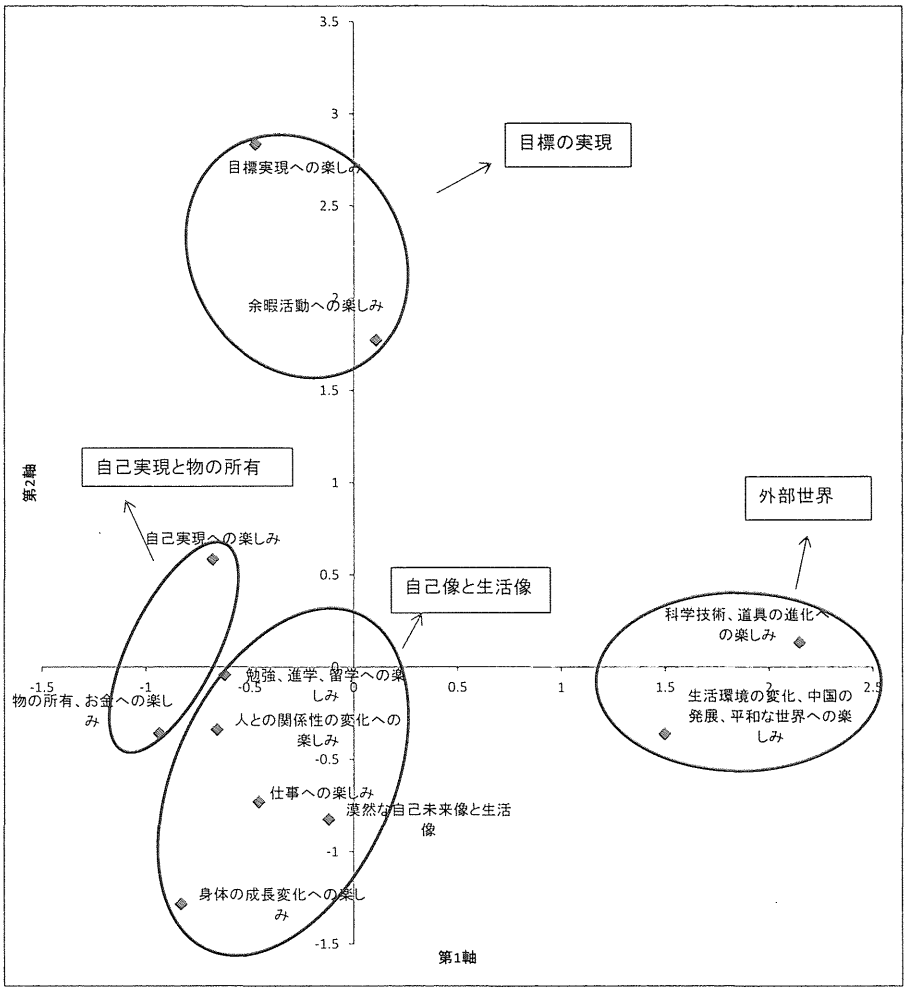

Figure 3-1　中国の子どもたちにおける「楽しみなこと」のカテゴリに関する数量化Ⅲ類の結果

一方，未来への展望内容には，子どもたちの今の生活環境の問題が反映していると考えられる。例えば，日中両国において，世界の終末や人類の滅亡などに関する心配が多く認められた。これらの発想はメディア（テレビ，テレビゲーム，携帯電話）を介して得られる情報に由来するのではないかと考えられる。特に子どものメディア利用実態に関する日本の調査の中で，小学生の中で，すでに携帯電話など，パーソナルメディアを多く持っていることが示されている（NHK, 2011）。メディアから発せられる情報が氾濫する生活環境にいるからこそ，今の時代の子どもたちに，自ら情報を選択し判断する能力が求められているといえよう。

また，勉強・進学など，教育の側面に関する記述において，日本の子どもたちに比べ，中国の子どもたちは，学歴や成績，学校のランキングなど，より功利的であり，高い達成意欲が示していた。その原因として，以下の２点が考えられる。まず中国の歴史的文化的な要因が挙げられる。中国では，古来「万般皆下品，唯有读书高」（ただ読書のみが尊く，それ以外はすべて卑しい）という考え方がある。これは数千年の科挙文化で残された考え方で，すなわち勉強を通して官僚になり，出世することを重要視する考え方である。このような考え方は，今日でも依然として中国社会に影響しているといえる。一方，現在の中国では，経済市場の急速な発展に伴い，人々が自分の能力を高め，競争するように駆り立てられている。学歴で人を評価する社会通念のもとで，親はわが子により良い学校に通わせ，より高いレベルの教育を受けさせるため，財を惜しまず子ど

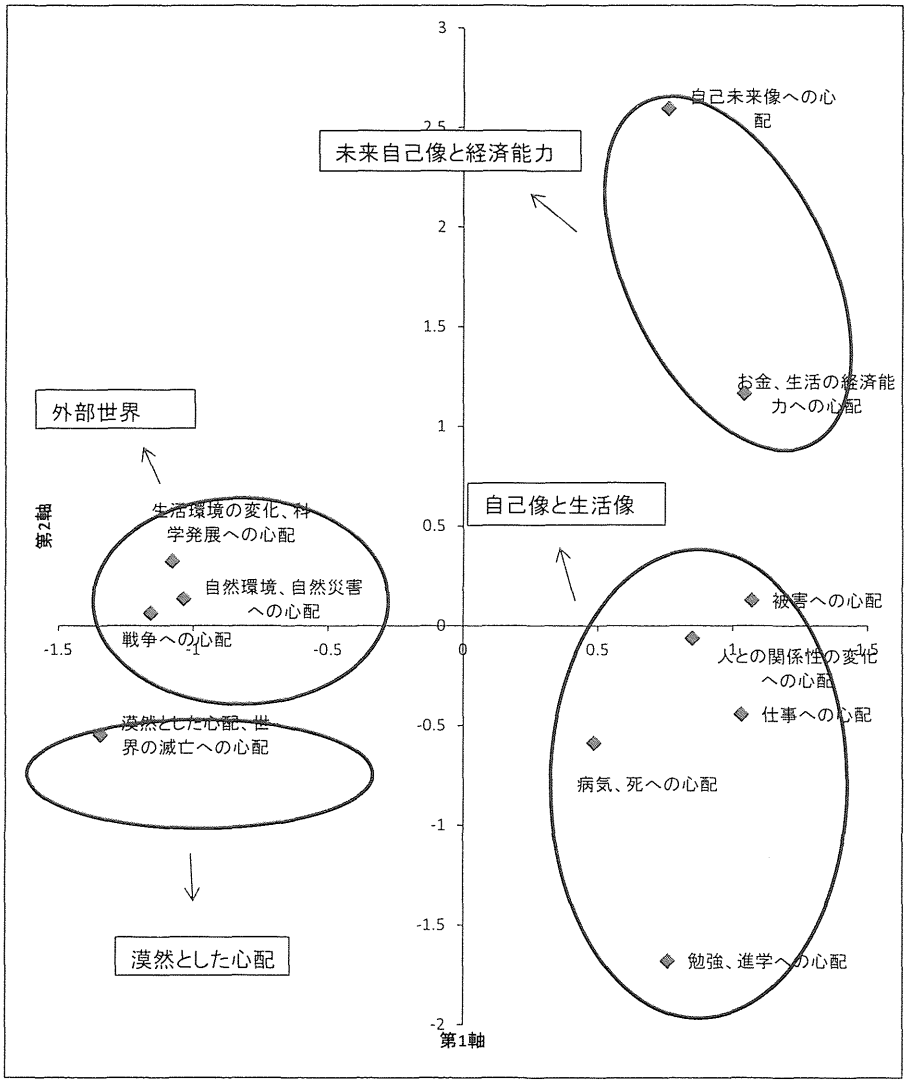

Figure 3-2　中国の子どもたちにおける「心配なこと」のカテゴリに関する数量化Ⅲ類の結果

もの教育に投資するが，それはある種の社会現象にまでなってしまっている。このような社会を背景にして，中国の子どもの教育に対する高い関心，また高学歴と名門学校への強い志向が生じていると考えられる。しかしながら，学びの喜びを感じたから勉強するよりも，親の期待や功利的な目標に動機づけられた状態で勉強すると考えれば，中国の子どもの勉学意識が受動的，かつ盲目的であるといった，調査結果への理解も難しくないといえよう。

一方，「楽しみなこと」と「心配なこと」に関する数量化Ⅲ類の分析及びクラスタ分析の結果は，日中の展望内容の特徴を一層明確に示した。両国の子どもの展望構造には，共通点として，展望内容が「私的未来」と「公的未来」の両方向に広がることが見出された。一方，展望構造の相違点として，日本では，記述が漠然としている内容が多い点が特徴であり，中国では，未来の目標や夢をより積極的に，貪欲に求める姿が見られた。

最後に，中国の子どもたちの「楽しみなこと」と「心配なこと」の分類カテゴリの分析結果において（Figure 3-1, Figure 3-2）で，自己実現，特に「世界・国・社会・周りの人に役に立つような人になる」ことを願う子どもたちが，同時に物質的な目標や経済的成功も強く志向しているという特徴が浮かび上

がった。経済が急速に発展する環境の中で，中国の子どもたちが未来に積極的および意欲的な姿勢を示している一方，社会制度が成熟していないため，特に近年頻繁にマスコミに取り上げられている「汚職官僚」や「成金」に関する報道の影響によるものか，子どもたちの価値観に些か功利的な色彩が見受けられた。

引用文献

ベネッセ（2006）．第４回学習基本調査・国際６都市調査　ベネッセ教育研究開発センター

ベネッセ（2009）．第２回子ども生活実態基本調査報告書　ベネッセ教育研究開発センター

岩淵悦太郎（1968）．ことばの誕生：うぶ声から五才まで　日本放送出版協会

フレス，P.（1957）．原　吉雄（訳）（1960）．時間の心理学―その生物学・生理学―　東京創元社．

北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学研究グループ（2001）．現代の子どもと「人生イメージ」―檜山・上ノ国町の地域調査報告　教育臨床心理学研究，**3**，1-135.

柏尾眞津子（2006）．性役割白井利明（編著）よくわかる青年心理学　ミネルヴァ書房 pp. 30-31.

子安増生・白井利明（2011）．発達科学ハンドブック３時間と人間　新曜社

Lamm, H., Schmidt, R. W., & Trommsdorff., G. (1976). Sex and social class as determinants of future orientation in adolescent. *Journal of Personality and Social Psychology,* **34**, 317-326.

レヴィン，K.（1951）．猪俣佐登留（訳）（1979）．社会科学における場の理論　誠信書房

渡辺誓司・酒井　厚（2011）．家庭におけるメディア・コミュニケーションと家族関係―小学生の子どもがいる家族の調査研究―　放送文化研究所年報2011，**55**，NHK 出版

Nurmi, J. E. (1987). Age, sex, social class, and quality of family interaction as determinants of adolescents'future orientation: A developmental task interpretation. *Adolescence* **22**, 977-991.

Nurmi, J. E. (1989). Development of orientation to the future during early adolescence: A four-year longitudinal study and two cross-sectional comparisons. *International Journal of Psychology,* **24**, 195-214.

蒋　豊（2012）．中国の小学生の夢は汚職官僚！？日本人の夢が中国に再考を促す　華字紙・日本新華僑報 http://www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=60219（2012年４月７日）．

Solantaus, T. (1987). Hopes and worries of young people in three European countries. *Health Promotion*. **2**, 19-27.

Sundberg, N., Poole, M., & Tyler, E. (1983). Adolescents' expectations of future events — A cross-cultural study of Australians, Americans, and Indians. *International Journal of Psychology*, **18**, 415-427.

塚野州一（1994）．過去，現在，未来における自己の価値づけの変容過程とその規定要因の検討　筑波大学博士（心理学）学位論文（未公刊）．

山田昌弘（2007）．希望格差社会―「負け組」の絶望感が日本を引き裂く　ちくま文庫

ザゾ，B.（1969）．久保田正人・塚野州一（訳）（1974）．学童の成長と発達　明治図書

（受稿３月29日：受理５月８日）